別紙様式第１０

学位論文審査結果の要旨

博士課程 甲	第　　号	氏　名	林 佑太
審査委員		主査氏名	黒田嘉紀
		副査氏名	荒木賢二
		副査氏名	関口敏

［論文題名］

How was cognitive behavioural therapy for mood disorder implemented in Japan? A retrospective observational study using the nationwide claims database from FY2010 to FY2015.

（本邦における気分障害への認知行動療法の実施状況－National Database を用いた調査［2010～2015 年度］）

BMJ Open, 10: e033365, 2020, doi:10.1136/ bmjopen-2019-033365.

［要　旨］

近年の精神疾患の罹患者数の多さは世界的な問題として挙げられており、特にうつ病は2030 年までに疾病負荷が最も高い疾患となることが予測されている。認知行動療法は、うつ病をはじめとする様々な精神疾患に対して高い効果が実証されている精神療法であるが、認知行動療法の実施状況は明らかになっていない。そこで審査論文は、レセプト情報・特定健診等情報データベース（National Database of Health Insurance Claims and Specific Health Checkups of Japan : NDB）を利用し、全国における認知行動療法の実施状況を評価したものである。

2010 年度から 2015 年度までの 6 年間に、保険診療内で認知行動療法を受けた総患者数は 60,304 人であったが、この 6 年間で 60%以上の地域で活用が減少していた。さらに実施状況には、都道府県間で、最大で約 420 倍の差があることが示された。

このように認知行動療法が普及しない理由として、著者は「所定の研修（厚労省主催の研修事業など）を修了した医師が外来で 30 分以上の面接を行う」という認知行動療法に関する厳しい算定要件がある一方、面接 1 回あたりの診療報酬が最大 5,000 円という採算性の低さが影響していることを示唆し、認知行動療法の活用を進めるには、日常臨床の実情に沿った診療報酬の改定や、医療機関の施設基準取得を支援することが、必要であることを指摘している。上記発表内容は、現皆保険制度に新たな知見を与えるもので、本論文は学位論文に値するものと判断した。

別紙様式第１１

最終試験結果の要旨

博士課程　甲	第　　号	氏　　名	林 佑太
審　査　委　員		主　査　氏　名	黒田義紀
		副　査　氏　名	荒木賢二
		副　査　氏　名	関口敏

［要　旨］

審査論文内容について、適切に発表が行われ、申請論文内容及び関連領域についての口頭試問において、適切な回答が得られたことから、学位授与に値する学力を有するものと認定した。